

IV. 平成29年度の外部評価の結果・ 平成30年度事業に対する自己評価

平成29年度大学教育再生加速プログラム外部評価の結果と今後の取組(案)

SH道場の実施と改善		AP事業 自己評価	外部評価 委員会の	H30年度 目標指標	平成30年度必要対応
1	SH道場の実施と改善				
1-1	各教育プログラムは適切に設計・運営・実施されたか	3	4	4	
1-2	学生はSH道場の目標に到達したか	3	3	4	平成30年度から全ての学科を対象に受講前・受講後の学生アンケートを実施する。学生アンケートを2回実施することとで、到達目標にどの程度近づいたのか検証する。また、全学科の専門教育科目にSH道場パフォーマンス科目を設置する。
1-3	教員はSH道場の目標に到達したか	3	3	4	教員アンケート結果から到達状況が低い項目については、学内のシンポジウムで取組の意義を再度確認する。また、アクティブ・ラーニングに関する研修会などを実施し理解促進に務める。
1-4	次年度のプログラム改善に向けた検証が実施されたか	4	4	4	
1-5	実施のための支援（教育改革推進部門、ICT活用教育部門、SH道場コンテンツ作成WG等）は適切に行われたか	4	4	4	
2	アクティブ・ラーニングの普及				
2-1	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための環境整備が適切に行われたか	3	3	4	専門教育科目にSH道場のパフォーマンス科目を設置する。これにより、学士課程全体にアクティブ・ラーニングを波及させるための環境整備を行う。また、情報提供を行うため、学生の学習を促進する授業事例カードの配付を行う。さらに、新たな全学調査を実施するための体制構築を目指す。
2-2	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたか	3	3	4	パフォーマンス科目の中でアンケート調査を実施し、その回答結果からアクティブ・ラーニングが学士課程全体に効果的に波及されたか検証を行う。新たな全学調査の実施体制を構築しつつ、全学的なSH道場の効果を検証する。また、全学科に対してAPシンポジウムへの積極的な参加を呼びかけるとともに、SH道場パフォーマンス科目の運用促進を図る。
3	事業運営の体制				
3-1	AP実施専門委員会の組織構成は、事業目的に照らして、適正なものであったか	4	4	4	
3-2	AP実施専門委員会の運営は、事業目的に照らして、適正なものであったか	4	4	4	
3-3	事業の効果検証に基づき、改善に繋げるためのPDCAサイクルが整備されていたか	4	4	4	
4	情報公開				
4-1	AP事業の取組を学内へ適切に広報し共有していたか	3	3	4	SH道場振り返りシンポジウムへの参加者向上や、シンポジウムの質的な改善を行う。APテーマⅠ「アクティブ・ラーニング」の報告書を作成し、学内に配付する。各プログラムは「SH道場振り返りシンポジウム」における各学部・学科の取組内容に関する発表を行う。
4-2	AP事業の取組を学外へ適切に広報し情報提供していたか	4	4	4	APテーマⅠ「アクティブ・ラーニング」の報告書を作成し、学外に配付する。APテーマⅠ・Ⅱ複合型と共同でシンポジウムを開催する。SPODや学内外の学会での発表するだけでなく、高等学校教員へのSH道場取組の紹介も進める。また、アクティブ・ラーニング・オンラインでのコンテンツ充実を図る。
4：十分に達成できた 3：おおむね達成できた 2：達成が必ずしも十分ではない 1：達成できなかった					
今後必要と考えられる取組					
- SH道場の学修成果の可視化と共有 - SH道場の取組と専門教育課程の接続 - 全学へのアクティブ・ラーニングの普及 - 院生コーディネーターと連携したプログラムの支援					

2. 平成30年度徳島大学教育再生加速プログラム事業自己評価結果一覧表

評価基準（評価指標） 4：十分に達成できた 3：おおむね達成できた 2：達成が必ずしも十分ではない 1：達成できなかった

1	SIH道場の実施と改善	平成29年度自己評価	平成29年度外部評価	平成30年度改善目標値	平成30年度自己評価	改善にあたっての具体的な取り組み	
1-1	各教育プログラムは適切に設計・運営・実施されたか	3	4	4	4	平成31年度SIH道場への参加率向上また、前年度のプログラム設計評価シートに記述されている項目にアクティブ・ラーニングのキーワード（反転学習・ルーブリック・eポートフォリオ）が適切に運用されているか検証し、改善を促す。SIH道場受講前後のアンケート調査における回収率改善に向け、コーディネーターへの呼びかけを徹底する。	
1-2	学生はSIH道場の目標に到達したか	3	3	4	3	平成31年度の授業設計コーディネーターと前任者との連携を強化する。ラーニングスキル（文章力・プレゼン力・協働力）実践の場を盛り込んだ授業設計を促す。SIH道場パフォーマンス科目との連携を強化する。	
1-3	教員はSIH道場の目標に到達したか	3	3	4	3	「反転授業」「ルーブリック評価」「振り返り」といったティーチングスキルをテーマとしたFDの企画、開催	
1-4	次年度のプログラム改善に向けた検証が実施されたか	4	4	4	4	過年度の「SIH道場プログラム設計評価シート」を共有し、平成31年度の授業改善に向けた活用を促す。「SIH道場パフォーマンス科目」や教育学IRの結果に基づく学修成果の検証を進める。	
1-5	実施のための支援（教育改革推進部門、ICT活用教育部門、SIH道場コンテンツ作成WG等）は適切に行われたか	4	4	4	4	ビデオ教材やテキストといったコンテンツについて補助金終了後も持続可能な環境を整備する。	
2	アクティブ・ラーニングの普及						
2-1	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための環境整備が適切に行われたか	3	3	4	4	eポートフォリオシステム利用促進のための支援体制を充実させる。事例カードの作成・公開を推進する。	
2-2	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたか	3	3	4	3	APシンポジウムの開催：学士課程全体にアクティブ・ラーニングを導入するための検討機会の構築 アクティブ・ラーニングの導入状況の調査を実施 アクティブ・ラーニング型授業に関連したテーマを扱うワークショップを定例開催	
3	事業運営の体制						
3-1	AP実施専門委員会の組織構成は、事業目的に照らして、適正なものであったか	4	4	4	4	平成29年度からAP実施専門委員会の構成員をSIH道場の実施プログラムごとに選出	
3-2	AP実施専門委員会の運営は、事業目的に照らして、適正なものであったか	4	4	4	4	AP実施専門委員会から授業設計コーディネーター・授業担当者への情報伝達の方法について、工夫・改善策を検討する。	
3-3	事業の効果検証に基づき、改善に繋げるためのPDCAサイクルが整備されていたか	4	4	4	4	AP事業全体を通してPDCAサイクルを継続する。	
4	情報公開						
4-1	AP事業の取組を学内へ適切に広報し共有していたか	3	3	4	4	APテーマⅠ「アクティブ・ラーニング」のポータルサイトアクティブ・ラーニング・オンライン（以下ALO）の情報提供を充実させる。 「SIH道場振り返りシンポジウム」を過去5年間の総括となる企画にする。	
4-2	AP事業の取組を学外へ適切に広報し情報提供していたか	4	4	4	4	ALO FacebookページとALOの併行運用を行う。 アクティブ・ラーニングの動画を撮影（平成28年から合計：18本） SPOD・大学教育学会・大学教育研究フォーラムにおいてSIH道場の取組についての発表を行う。	

3. 平成 30 年度大学教育再生加速プログラム事業に対する自己評価

徳島大学大学教育再生加速プログラム事業（以下、「AP 事業」という。）については、毎年度自己評価を行い、外部評価委員会を開催し、事業評価を受けることで次年度の改善につなげることとしている。

自己評価については、「1. SIH 道場の実施と改善」「2. アクティブ・ラーニングの普及」「3. 事業運営の体制」「4. 情報公開」の 4 つの大項目について、それぞれ小項目を立て、以下の 4 段階で評価を行った。

「4：十分に達成できた」

「3：おおむね達成できた」

「2：達成が必ずしも十分ではない」

「1：達成できなかった」

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
1-1	各教育プログラムは 適切に設計・運営・ 実施されたか	3	4	4	4

○自己評価の根拠（評価 4）

平成 30 年度の SIH 道場では、16 プログラムが展開された。各プログラムは概ね昨年度の実施内容を中心として設計されていたが、授業設計に際しては、昨年度の授業設計コーディネーターが作成した「プログラム設計評価シート」を参照することとし、昨年度の授業設計コーディネーターによる振り返りを踏まえた授業設計を求めた。これにより、昨年度の成果を踏まえての授業設計と改善が各プログラムにおいて行われ、より適切な授業設計が行われたといえる。また、全てのコースにおいて「プログラム設計評価シート」が提出され、振り返りシンポジウムにおいてプログラムの成果と課題が共有された。さらに、今年度の SIH 道場運営に係る自己評価では、16 プログラムのうち 15 プログラムの授業設計コーディネーターのから「5.十分であった」または「4.概ね十分であった」との評価が寄せられている。

以上を鑑み、本項目について「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

AP 実施専門委員会によって、平成 30 年度より実施した受講前・受講後の学生アンケートについて、受講前に比べ受講後の回収率が低くなっていることが指摘された。高い回収率を実現できるよう、支援体制を充実させる。

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
1-2	学生は SIH 道場の 目標に到達したか	3	3	4	3

○自己評価の根拠（評価 3）

各プログラムの授業設計コーディネーターが作成することとなっている「プログラム設計評価シート」の記載を見ると、16 プログラム中 12 プログラムの授業設計コーディネーターが、SIH 道場の必須項目となっている早期体験・文章力・プレゼン力・協働力・振り返りの 5 項目全てについて、学生が達成目標を達成できたとしていた。

また、ラーニングスキルに関する項目（文章力・プレゼン力・協働力・振り返り）である「（各スキルを）実践することができるか」という問に対し、受講前と受講後の学生アンケートの結果を比較したところ、肯定的意見（「全くそう思う」または「そう思う」）の割合が 5%から 14%増加している結果が認められた。SIH 道場の受講を通じて、学生たちが各ラーニングスキルを身に付けたという自信がついた様子が窺える。さらに、受講後学生アンケートのラーニングスキルの実践方法を理解したかどうかを問う項目では、プレゼン力以外の 4 項目（早期体験・文章力・協働力・振り返り）において 80%以上の肯定的意見（「とても当てはまる」または「どちらかと言えば当てはまる」）が得られた。プレゼン力については 75%という結果であり、他項目に比べて低い割合にとどまった。

こうした受講生の意識的変化の結果と、受講生の活動を監督した授業設計コーディネーターの評価にもとづき、本項目における自己評価は「3:おおむね達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

「プログラム設計評価シート」には、今後の改善点やそれを考えるための手掛かりとなる記述が授業設計コーディネーターによって書かれている。平成 31 年度授業設計コーディネーターに対して、SIH 道場の授業設計のスタートとなる「SIH 道場キックオフミーティング」において、昨年度の「プログラム設計評価シート」を踏まえた改善を求めると共に、これまで十分に行えていなかった前任者との密な連携を図り、情報交換を行うことを同時に推奨していく。

また、受講後学生アンケートでのプレゼン力習得に関する肯定的意見の低さを受けて、授業設計コーディネーターにプレゼン実践の機会を充実させることを呼び掛けるとともに、平成 30 年度より運用を開始した「SIH 道場パフォーマンス科目」との連携を強化していくこととする。

【外部評価者メモ欄】

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
1-3	教員は SIH 道場の 目標に到達したか	3	3	4	3

○自己評価の根拠（評価 3）

平成 30 年度の教員アンケートの結果のうち、「1.SIH 道場の目標を理解して授業を行った」「2.アクティブ・ラーニング型授業の意義を理解した」については、「とても当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を選択した教員が、大学全体でそれぞれ 92%、93%となっており、多くのプログラムで、SIH 道場の意義や目標についての理解が進んでいる結果になった。大学全体での結果は昨年度とほぼ同じ値（平成 29 年度は問 1 が 93%、問 2 が 94%）であり、4 年目を迎えた SIH 道場への理解浸透は成熟した段階にあると言える。また、「4.アクティブ・ラーニング型授業を担当する他の授業で導入したい」と回答した教員が平成 29 年度より 3%増加した 79%となり、「3.アクティブ・ラーニング型授業を実施することができる」かどうかという視点では 81%（昨年度比－6%）の教員が「とても当てはまる」または「どちらかといえば当てはまる」と回答している。

アクティブ・ラーニングに関する意義理解や実践するスキル習得について約 8 割もの教員から肯定的意見が得られた一方で、各種ティーチングスキルを実際に導入するかという点で課題が残る結果となった。「5.反転授業の意義を理解した」「8.ループリックの意義を理解した」「12.学生に学修の振り返りをさせることの意義を理解した」についてはそれぞれ 60%（昨年度比+2%）、79%（昨年度比+8%）、85%（昨年度比+5%）という結果が得られており、意義理解の深まりが窺える。これらのスキル習得を問う項目でも、習得することができたとする意見はそれぞれ 50%（前年度比+1%）、72%（前年度比+5%）、84%（前年度比+17%）という結果が得られた。その一方で、「7.反転授業を担当する他の授業で導入したい」「10.ループリックを担当する他の授業で導入したい」「13.学生に学修の振り返りをさせることを他の授業で導入したい」の項目については 42%（前年度比－5%）、55%（前年度比+3%）、61%（前年度比－7%）という結果であった。

以上の結果から、教員は習得したティーチングスキルを他授業において実践することについて依然として課題が残るものの、SIH 道場の目標におおむね達成していると考えられる。よって本項目における自己評価は「3：おおむね達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

SIH 道場は教員に対してアクティブ・ラーニングの意義・手法を理解する機会になっていると考えられる。今後は「反転授業」「ループリック評価」「振り返り」といったティーチングスキルの実践を他の授業で取り組んでもらえるよう、これらをテーマとした FD の開催など、支援体制を充実させていく。

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
1-4	次年度のプログラ ム改善に向けた検 証が実施されたか	4	4	4	4

○自己評価の根拠（評価 4）

各プログラムの授業設計コーディネーターが、「SIH 道場プログラム設計評価シート」に基づき SIH 道場の取組の振り返りを行う際には、各プログラムでの効果検証の参考資料として、学生および教員対象のアンケート集計結果を提供している。これらの資料を参考に、授業設計コーディネーターは総合的にプログラムを評価し、「SIH 道場プログラム設計評価シート」の項目「改善したい点」と項目「次年度に向けた対応」に記述を行っている（16 プログラム全てが記載）。

さらに、各学部・学科の大学教育再生加速プログラム実施専門委員会（以下、「AP 実施専門委員会」という。）委員が、学部単位での取組報告「SIH 道場の取組と課題」を作成し、プログラムの総括を行っている。加えて、「SIH 道場に関する評価・改善ワーキンググループ」において、SIH 道場を受講した 23 名の学生委員が SIH 道場の良かった点、改善点について提案を行っている。今年度実施した学生委員全員に対するインタビュー結果については、学生の回答に基づき現状をまとめた上で今後活かすためのポイントを提示している（本報告書「SIH 道場評価・改善ワーキンググループ学生委員からの提案」を参照）。各学部・学科の次年度の授業設計コーディネーターは、これらを参考にしてプログラム改善を行うことができる。以上のように、次年度のプログラム改善に向けた検証のステップは明確に位置づけられていると言える。

このことから、本項目における自己評価は「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

過年度の「SIH 道場プログラム設計評価シート」に記載された各プログラムの改善点について、平成 31 年度の SIH 道場授業設計コーディネーターによる検討を促すとともに、プログラム全体の支援体制を充実させていく。また、平成 30 年より導入した SIH 道場パフォーマンス科目や、教学 IR による学修成果の検証を推進する。

【外部評価者メモ欄】

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
1-5	実施のための支援 (教育改革推進部 門, ICT 活用教育部 門, SIH 道場コンテ ンツ作成 WG 等) は 適切に行われたか	4	4	4	4

○自己評価の根拠（評価 4）

SIH 道場の実施の支援については、総合教育センター教育改革推進部門を中心とし、ICT 活用教育部門、SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループ等と協力して行った。主な内容は、次の 5 つである。①授業設計のサンプルの提示、②授業に必要な教材コンテンツの作成、③授業計画・実施中の随時個別相談対応、④授業担当者に対する説明会・FD の実施、⑤授業改善に向けた評価の支援を行った。

平成 29 年度に構築した SIH 道場の支援業務を担う院生コーディネーター制度については平成 30 年度も継続的に運用し、研修会を受講した学生を院生コーディネーターとして採用した。各プログラムにおいて採用された院生コーディネーターは SIH 道場の授業に関連する業務として ICT 機器の補助などを担った。また、ICT 機器利用促進を目的とした FD「スマートフォンを活用した授業改善ワークショップ」の実施し、対面授業で簡易的に導入できる ICT 機器の利用についてワークショップ形式で研修会を実施した。

このように、従来からのプログラム改善のための仕組みに加え、平成 30 年度には教員支援に繋がる取組も進行している。このことから、本項目における自己評価は「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

補助金終了後となる平成 32 年度以降に向けて、ビデオ教材やテキストといったコンテンツについて、持続可能な支援の在り方を検討していく必要がある。年度ごとに発行していたテキストの修訂や、WEB 上の教材の整備を行っていく。

【外部評価者メモ欄】

2	アクティブ・ラーニングの普及	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
2-1	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための環境整備が適切に行われたか	3	3	4	4

○自己評価の根拠（評価 4）

平成 30 年度はアクティブ・ラーニングの普及に向けて全学に事例カード開発を依頼し、全学で 10 枚もの事例カードを作成するに至った。なお、今後も年間 10 枚の事例カード作成を目標に取り組んでいく。

また、SIH 道場で習得したラーニングスキルを実践するための科目として、全学部学科に「SIH 道場パフォーマンス科目」を設置した。「SIH 道場パフォーマンス科目」は 2・3 年次が受講する既存の専門科目の中から選定され、選定の条件として SIH 道場で学んだラーニングスキルを実践することができる科目であることとしている。

このほか、平成 28 年度から継続的に取り組んでいる FD の e コンテンツ化についても進展があった。今年度はアクティブ・ラーニングを普及させるためにアクティブ・ラーニング型授業の方法をシラバスに明記する事を促す「シラバスの書き方 FD プログラム」の動画を Moodle に掲載（e コンテンツ化）した。

このことから、本項目における自己評価は「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

これまでの環境整備は書籍や資料、LMS の開発に留まっていたが、学士課程全体にアクティブ・ラーニングを波及させていくためには学部・学科のカリキュラムの中に SIH 道場で学んだ要素を位置づけていく必要がある。今後は、SIH 道場と関連する科目をカリキュラムの中に体系的に位置づけ、SIH 道場で学んだラーニングスキルの着実な修得を目指し、支援を行っていく。

2	アクティブ・ラーニングの普及	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
2-2	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたか	3	3	4	3

○自己評価の根拠（評価 3）

平成 30 年 11 月 24 日に大学教育再生加速プログラムテーマ I 及びテーマ I・II 複合型共同開

催シンポジウムを開催した。シンポジウムのテーマ「アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化」のもと、それぞれのテーマの幹事校である徳島大学および京都光華女子大学短期大学部による幹事校としての取組が紹介され、その上でテーマⅠに選定されている県立広島大学ならびに仙台高等専門学校からアクティブ・ラーニングの事例紹介がなされ、テーマⅠ・Ⅱ複合型に選定されている山口大学と長崎大学からアクティブ・ラーニングと学修成果の可視化についての事例紹介がなされた。パネルディスカッションでは各大学の成果と課題についてフロアと共に議論を行った。本シンポジウムは本学における学士課程全体にアクティブ・ラーニングの推進を検討する機会になった。

このことから、本項目における自己評価は「3:おおむね達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

平成 29 年度に引き続き、学士課程全体にアクティブ・ラーニングを普及させる取組としてのシンポジウム開催など間接的な取組に留まっている。平成 31 年度からは「すぐ使える 90 分セミナー～学生のために学ぶ時間を少しだけ作りませんか！～」と題して、「授業設計」や「ICT 活用」「アイスブレイク」といったアクティブ・ラーニング型授業に関連したテーマを扱うワークショップを定例開催する。こうした取組を通じて直接的な支援を実現し、アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させられるよう努める。

【外部評価者メモ欄】

3	事業運営の体制	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
3-1	AP 実施専門委員会の組織構成は、事業目的に照らして、適正なものであったか	4	4	4	4

○自己評価の根拠（評価 4）

AP 実施専門委員会は、次の 4 つを審議するために設置されている。①全学共通科目「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の開発及び実施に関すること。②徳島大学におけるアクティブ・ラーニングに関する調査及び評価に基づく改善に関すること。③アクティブ・ラーニングを推進するための環境整備に関すること。④その他アクティブ・ラーニングの推進に関すること。

専門委員会は、副学長（教育担当）を委員長とし、教養教育院長、総合教育センター教育改革推進部門長、各学部（学部兼任された大学院教員を構成員として含む。）および全学共通教育センターから選出された教員 各 1 人、総合教育センターから選出された教員 3 人、学務部長、学務部教育支援課長及び学務部教育支援課教育企画室長、その他専門委員会が必要と認める者で構成されている。

AP 実施専門委員会において、SIH 道場の実施に関する、全体統括、授業設計コーディネーター等の人材の選出・割り当て等を行う他、事業全体の評価に基づく改善の計画を審議し、実施に当たっては、総合教育センター教育改革推進部門や SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループ、教育について考え提案する学生・教職員専門委員会（SIH 道場に関する評価・改善ワーキンググループ）が連携して支援や評価を行い、各学部・学科の授業設計コーディネーターを通じた部局の SIH 道場実施支援を図った。

今年度から AP 実施専門委員会規則を一部改正し、授業設計コーディネーターが AP 実施専門委員会の構成員として議論に参加できる制度を整備した。この変更により、AP 実施専門委員会での議論が各学部・学科に情報共有しやすくなった。情報共有の体制が整い、円滑に事業が推進したため、本項目における自己評価は「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

今年度の構築した体制を維持し、AP 実施専門委員会での議論を各学部学科に対して情報共有していく。

3	事業運営の体制	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
3-2	AP 実施専門委員会の運営は、事業目的に照らして、適正なものであったか	4	4	4	4

○自己評価の根拠（評価 4）

平成 30 年度における AP 実施専門委員会は、委員会を 6 月、10 月、2 月の計 3 回開催した。委員会においては、平成 30 年度の SIH 道場の設計・実施状況のとりまとめを行い、各学部・学科でプログラムの改善を行うことができるよう、アンケート調査等の実施を含む評価指標の策定を審議した。加えて、SIH 道場の取組が学士課程全体に波及し、アクティブ・ラーニングが全学的に展開するための施策の検討等を行った。AP 実施専門委員会の委員は、AP 実施専門委員会での決定事項を各学部・学科の授業担当者に伝えるという役割を担うほか、SIH 道場終了後に AP 実施専門委員会（授業設計コーディネーター）がプログラム設計について振り返りの内容や課題をとりまとめ、AP 実施専門委員会に報告する。それを受けて、AP 実施専門委員会では、事業運営の方法を見直すことができる。平成 29 年度の授業担当者 FD の参加率（個別対応を含む）は 89%であったが、平成 30 年度は上記の改善を実施したことにより FD の参加率（個別対応を含む）は 94%であった。

こうした結果を踏まえ、本項目における自己評価は「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

AP 実施専門委員会規則に沿って、委員会の運営を行う。

3	事業運営の体制	平成 29 年度 自己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
3-3	事業の効果検証に基づき、改善に繋げるための PDCA サイクルが整備されていたか	4	4	4	4

○自己評価の根拠（評価 4）

AP 実施専門委員会は、SIH 道場を含む、AP 事業全体の評価指標を策定し計画としてまとめ、学生および教員対象のアンケート調査を計画・実施した他、これらのアンケート集計結果に基づ

き、授業設計コーディネーターが次年度の改善に向けた振り返りを行うために、「プログラム設計評価シート」を提供した。各学部・学科の AP 実施専門委員会委員は、この設計評価シートの記載内容等に基づき、学部での SIH 道場の成果と課題を報告書にまとめている。これらのプログラムの実施結果を、事業運営や実施支援の観点から総合的に自己評価し、その結果をもとに外部評価委員会による評価を受けることで、次年度の改善につなげることができる。今年度は、SIH 道場の実施 4 年目として、これまで構築してきたプロセスのもとに、AP 事業全体の PDCA のサイクルを推進した。

以上のように、平成 30 年度はこれまで整備した PDCA サイクルに基づいた事業の改善が適切に行われたとみなし、本項目における自己評価は「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

今後も PDCA サイクルを実施し、自己評価や外部評価の結果を踏まえた事業全体の改善策について継続的に検討する。

【外部評価者メモ欄】

4	情報公開	平成 29 年度自 己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
4-1	AP 事業の取組を学 内へ適切に広報し 共有していたか	3	3	4	4

○自己評価の根拠（評価 4）

AP 事業の取組については、大学ウェブページにおいて情報提供を行っている。SIH 道場の概要や目的、年度計画等を記載している他、SIH 道場の学生用テキスト（PDF 版）も公開している。また、平成 30 年度に実施した SIH 道場の取組を共有し課題を検討するために、学内教職員、学生を参加対象とする「SIH 道場振り返りシンポジウム」を開催した（学内教職員、学生および外部評価委員を含む計 94 名が参加）。その他、AP 事業の目的や内容について大学全体で共有化を図るために、徳島大学大学教育再生加速プログラム事業リーフレットを作成し学内教職員に配付している。

また、平成 29 年度から運用を開始した「アクティブ・ラーニング・オンライン」（以下、ALO）を継続的に運用し、平成 30 年度はこれと併行する形で ALO Facebook ページの運用も開始した。ALO Facebook ページは補助金終了後も WEB サイト ALO における情報を公開できるよう整備したものであり、平成 30 年度・平成 31 年度は ALO との併行運用を行う。

以上から、取組が適切に行われていると考えられるため、本項目における自己評価は「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

「SIH 道場振り返りシンポジウム」については、来年度で AP 事業最終年度を迎えることもあり、過去 5 年間の SIH 道場の取組を総括するような内容のシンポジウムとなるよう検討を重ねなければならない。過去に授業設計コーディネーターを担当した教員によるパネルディスカッションを企画するなど、活発な議論の場を形成し、補助金終了後も持続可能な SIH 道場の運用実現を目指す。

4	情報公開	平成 29 年度自 己評価	平成 29 年度 外部評価	平成 30 年度 改善目標値	平成 30 年度 自己評価
4-2	AP 事業の取組を学 外へ適切に広報し 情報提供していた か	4	4	4	4

○自己評価の根拠（評価 4）

AP 事業の取組については、大学ウェブページに随時掲載している他、学内外の教職員を参加対象とする、大学教育再生加速プログラムテーマⅠ及びテーマⅠ・Ⅱ複合型共同開催シンポジウム

を開催した。徳島大学以外の実践事例を共有することで、学内外の教職員に、これからのアクティブ・ラーニングの推進について検討する機会になった。

また、平成 28 年度から継続してテーマ I 選定校 9 校の取組について情報発信を行うため、①選定校 9 校の取組の概要と成果を閲覧できるポータルサイト ALO の構築・運用、②授業動画配信サイトにおけるアクティブ・ラーニング型授業の実施風景及び授業担当教員へのインタビューの動画の配信、の 2 つの取組を進めている。これに加え平成 30 年度から ALO との併行運用を開始した ALO Facebook ページでの広報活動も行っている。この ALO Facebook ページにおいては、AP テーマ I 選定校の各校担当者ともアカウントを通じて繋がり、記事を自らの Facebook アカウントを通じてシェアする形での周知活動も実現している。これにより、徳島大学の AP の取組についての情報発信がさらに拡大されることが期待できる。

平成 28 年度から撮影を開始したアクティブ・ラーニング型授業の動画は平成 30 年度までに 18 本に増え、平成 31 年度も継続して撮影予定である。ポータルサイトの ALO へのアクセス数は平成 31 年 2 月 6 日時点で 4,450 回に上り、取り組みを幅広く社会に発信できている。

以上のことから、AP 事業の取組を学外へ適切に広報し情報提供していたと言えるため、本項目における自己評価は「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

大学教育再生加速プログラムテーマ I 「アクティブ・ラーニング」シンポジウムについては、学外からの参加者をさらに拡大するため、企画の内容や開催場所について再検討していく。

【外部評価者メモ欄】

平成 26 年度文部科学省大学教育再生加速プログラムテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）

平成 30 年度徳島大学 大学教育再生加速プログラム事業実施報告書
学生と教員が共に成長する「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」

発行日：平成 31 年 3 月

発 行：徳島大学 大学教育再生加速プログラム実施専門委員会

編 集：塩川奈々美（大学教育再生加速プログラム実施専門委員会）